

この夏休みは、待ちに待った「キングダム2」を映画館で見れる。前は4人で見たので、息子と娘も来れるといい。

特段おかしくはない文だと感じる方もいるかもしれない。だが、正しくはない。文化庁では「国語に関する世論調査」というものを行っている。その結果が出るたびに報道されている。国語に対する認識のほか、ローマ字表記に対する考え方や伝統的な用語の使用率などを調査している。

2020年度の調査では、本来適当ではないとされてきた「見れる」「来れる」などのいわゆる「ら」抜き表現を使う割合が、半数以上に上ることなどが分かった。この結果に特別驚かされることはない。「ら」抜き表現という言葉が登場してからだいぶ経つ。

では、日本語を大切にしていないのかというと、そういうわけではない。国語に対する認識の調査では、「日本語を大切にしているか」という質問に対して「大切にしていると思う」が19.6%、「あまり意識したことはないが、考えてみれば大切にしていると思う」が54.3%と、肯定的回答が73.9%となり、前回、同様の質問を設定した17年度調査から9.0ポイント上昇している。これは、01年度、08年度、15年度の水準まで回復したことになる。

言葉遣いに対する印象や、慣用句の認識などの分野では「れる／られる」「せる／させる」「やる／あげる」の表現についての設問があった。

例えば、「れる／られる」では「食べる」「来る」「考える」「見る」「出る」の5つの動詞に「れる／られる」を用いる場合、どちらを普段使うかを聞いている。この結果、共通語において適当ではないとされてきた用語で「来れますか」が52.2%、「見れた」は52.5%の回答者が「普段使う」と答え、「出れる」も48.1%と半数近くに達している。一方「食べれない」は33.4%、「考えれない」4.9%と使用率は低かった。

学校の国語の授業では、正しい言葉遣いを教えているはずである。だから、ついつい「ら」抜き言葉を使ってしまっている、それがおかしいとは感じているのだろう。子どもたちからしたら、学校で学習する言葉の量よりも、テレビなど世の中から教わる言葉の量の方が圧倒的に多いだろう。それらの影響を受けずにいる方がむずかしい。

だが、「来れますか」も「見れた」も50%程度である。約半数は、まだまだ正しい使い方を認識している。問題は、「ら」が抜けていても意味が通じてしまうところだろうか。普段話しているときには、ある程度仕方がないとしても、書く場合には正しく「ら」を使いたい。

次の文は、どうだろうか。国語に関する調査でよく出てくるものである。

「彼がどんなに落ち込んでいても、厳しく接した方がいいよ。情けは人のためならずって言うだろう。」

本来は、人に対して情けをかけておけば、巡り巡って自分に良い報いが返ってくるという意味である。調査のたびに本来の正しい意味が報道されるため、少しずつ本来の意味が浸透してきているように思う。

このように、言葉には誤用が少なくはない。言葉はむずかしい。だが、人と人がコミュニケーションをとる上で大切なものである。これからも言葉を大切にしたい。情けは人の為ならずには、反対語がある。「情け無用」である。情け無用の反対の言葉と理解すれば容易に理解できるかもしれない。